
遊戯王 ～blaze～

ヴィレッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜blaze〜

【Nコード】

N5830U

【作者名】

ヴィレッジ

【あらすじ】

家族旅行の際中にすっかり船から落ちてしまった少年、《水嵩孝一》は目が覚めるとそこはまったく知らない場所だった。それもそのはず、話を聞いてみればここは遊戯王GXの世界だったからだ。勝手が分からないこの世界で孝一に一体どんな出来事が待ち受けているのか…。

プロローグ（前書き）

すみません。

前作の《遊戯王GX》 flame》なんです、非常にオリカが多いので消しました。今回の物語は極力オリカを出さないように配慮します。

プロローグ

「うおわあああああああ！！！」

皆さんさようなら。俺の名前は《水嵩孝一》みずたかこういち。

遊戯王が好きな大学生だ。といっても今はまったくやっていないが…。

ん？最初に言った言葉が間違ってる？

いや、間違ってるないぞ。何故なら俺は今、絶体絶命の状況に陥っているからだ。そうだな、厳密に言えば……、

ザッパアアアン！！

溺れている。

しかも12月の極寒の夜の中、嵐で荒れ狂う海のと真ん中をさつきからどんぶらこ〜どんぶらこ〜と流されている。

理由？ふつ、聞いてくれるか？聞いてくれるのか？聞いてくれるよな！？つーか聞けよな！！

……こほん。先日、父さんが近所のスーパーの福引きで見事豪華沖縄旅行のチケットを当ててよっしゃあ！早速行こうぜ！！とか何とか言って父さんと母さんと姉さんと俺の家族4人でしっかりと準備をし、沖縄へ向けていざ出発！沖縄行きの船に乗り込んだ。乗り込んだところまでは良かった…。

しかしその途中、乗っていたその船からうっかり転落してしまい、

現在の状況に至るといふわけだ。

ザバアアアン！！

「ぶわあっ!!?」

やばい！やばい！やばい！やばい！

このままでは本当に死んでしまう！！

さっきはさようならとかなんとかなんとか簡単に言っただけど、

「やっぱ死にたくねええええええええええ！！！」

ズゴゴゴゴゴゴ……

ん？なんだこのズゴゴゴゴゴ...って？

とてつもなく嫌な予感がするのだが……。固唾を呑んでおそるおそる後ろを振り返ってみると……、

ズゴゴゴゴゴ……

とんでもなくバカでかい波が迫ってるし……！

「ぎゃあああああああ……！」

次いで襲ってきた激しい衝撃とともに俺の意識はブツリと音を発てて途切れた。

プロローグ（後書き）

えっと…プロローグの後書きなんですが、前作を読んで下さった方々は分かると思いますが、前作の《遊戯王GX〜flame〜》のプロローグをパクリました。

ごめんなさい！ネタが思い付かなかったんです！

次回からちゃんと考えるので勘弁して下さい！

第1話「水嵩 孝一」(前書き)

第1話です。

何かありましたら感想の方でどうぞ。

第1話「水嵩 孝一」

（孝一 side）

「……う…ん…」

重たい瞼を開くとまず視界一杯にぼんやりと白い壁が広がった。天井？って事は俺は寝かされているのか。

「……うつ…」

この鼻をついてくる特有の刺激臭は…化学薬品の臭い。という事はここは何処かの医療施設か何かか…。

「天国…はあり得ないよな」

天国で化学薬品の臭いがするわけねーもんな。つて事はつまり、

「……俺は助かったのか…？」

あの大津波を見た時、これは絶対に死んだと思ったんだけどな。どうやら命拾いしたみたいだ。

「体も…動く」

体の方は寝ているうちに全快したみたいだ。それにしても誰もいないのか？

「……つて、なんだ……」

いたよ。

俺が寝かされていたベッドを枕代わりに女の子が1人、すやすやと寝息を発っていた。

「ふーん……」

けっこう可愛い子だな。

後3〜4年もしたらすごい美人になるかもしれない。

「……ん？」

備え付けの机に四角いホルダーがあるのを見つけた。

振ってみるとカシャカシャ音がする。

一体何が入ってるんだ？

「この子のか……？」

だとしたら開けるのはマズいかな。

他人の……しかも女の子の持ち物だしな。これは後で聞こう。それよりいい加減起こして話を聞かないとな。

「おーい」

「すう……すう……」

「おーい起きろ」

「う……うん……」

んぐつすりだな。しょうがねー、少し荒業でいくか。

「おーいきろー!」

「ふえあああああつ!」

おつ、起きた起きた。

「よお、おはよう。よく寝てたな?」

「ふあゝい...?」

...少し強く揺らし過ぎたか?

「わるい、大丈夫か?」

「あ...はい、えっと...おはようございます」

ああうん、こりゃダメだ。

おまけに寝ぼけてやがる。

まあそろそろ意識もはつきりしてくる頃だろ。

「...え?...ああ!」

おつ、案外早かったな。

「あなたは!良かった!気がついたんですね!」

「ああ。とりあえずまずは自己紹介な。俺は『水嵩 孝一』だ。よ

ろしくな」

「はい！私は《富士宮楓》ふじみや かえでです。こちらこそよろしく願いします」

《富士宮 楓》か。

元気が良い子だな。

「ところで富士宮。ここは一体何処なんだ？」

「あつ、はい。ここはデュエルアカデミアです」

……………は？

「いや、ごめん。聞き間違えたかもしれない。今なんて言った？」

「いやだから、ここはデュエルアカデミアです」

……………。

「はああ！？」

えっ？ええ！？デュエルアカデミアって、デュエルアカデミアアア
！？

なんで！？なんでデュエルアカデミアがこの世界にあるんだよ！？

「えっと、因みに校長先生の名前は…？」

「鮫島だけど？」

「……………」

終わった。俺の何かがたつた今終わった気がした。

原因は分からないけど、どうやら俺は遊戯王GXの世界に入り込んでしまったようだ。

「どうかしたの？」

「あ？いや、なんでもない」

参ったな。まさかこんな漫画みたいな出来事に巻き込まれるだなんて、19年間生きてて1度も思わなかったな。

つか俺、遊戯王の世界に来たところでデッキ持ってねーし。無理じゃねーか。と思ったのも束の間、その考えは呆気なく崩れ去った。

「あつ、そういえば…はい」

「ん？」

富士宮が思い出したとでも言うような口振りで机の上に置いてあったさっきのホルダーを俺に手渡してきた。

「これ、私が水嵩さんを浜辺で見つけた時に水嵩さんがしっかり握り締めてたんだよ？」

「俺のなのか？」

「うん、そうよ」

もう一度ホルダーを振ってみる。
やっぱりカシャカシャ音がする。こんなものまるで身に覚えがない
んだけどな。とりあえず開けてみるか…。

「……あつ……」

ホルダーから出てきたのは遊戯王カードの束だった。
「つかこれ、俺が遊戯王を辞める直前まで使ってたデッキじゃねー
か？」

「水嵩さん、デュエリストなんだ！」

「あ…ああ、まあな…」

とりあえず口裏合わせておこう。
それにしても変だな。俺が使ってたデッキは遊戯王を辞める時に近
所に住んでるガキンちょにあげたはずなんだけどな。

コンコンッ

「あつ、はい」

「失礼します」

不意にドアをノックする音が聞こえてドアが開くと外から2人の男の人が入ってきた。

1人は優しい目をしたツルツっぱげの爺さんでもう1人は長身の金髪オカッパ頭の外国人だ。

「なあ富士宮。誰だこの爺さん達は？」

「じ、爺さんって…」

「いきなり失礼な奴なのーネ」

「構いませんよ。事実私は爺さんですしね」

はっはっはと笑って爺さんがそう言った。

「まずは自己紹介をしましょう。私はこのデュエルアカデミアで校長を任されている鮫島です」

「ワタクシは教頭の《クロノス・デ・メディチ》なのーネ！」

…！！

この人達が鮫島校長にクロノス先生。リアルで見るとこんな感じなのか。

「俺の名前は《水嵩 孝一》っていいいます」

「では、孝一さんと呼びましょう。孝一さん、二三質問してもよろしいですか？」

「はい」

「孝一さん、あなたが浜辺で漂着していたところを発見されたというのはすでにお聞きになりましたか？」

「はい。ここにいる富士宮さんから聞きました」

まあ聞いたと言っても話の途中で小耳に挟んだっただけだな。

「では、何故そうなったのか、その経緯をお聞かせ願いませんか？」

「……………」

ま、当然の質問だよな。

さて、どうするか。記憶喪失って手は若干信憑性が薄いな。いつでも他に何か良い手があるわけでもないし……。
んゝ仕方ないか……。

「鮫島校長、これから話す事は紛れもない真実だという事を覚えておいてください」

「……………」

「水嵩さん……？」

「……わるい富士宮。終わるまで席を外してくれないか？」

「え？」

こんな事を俺の恩人に言うのはすげえ心苦しいけど、

「頼むよ」

言わないわけにもいかないんだ。

「……うん、わかった」

富士宮は笑ってそう言つと、静かに保険室を出ていった。

「ふう……」

「……では、お聞かせ願いますか？」

「はい、… 鮫島校長、俺は、異世界の人間なんです」

「っ！？」

「な、なんですート！？」

俺は話す事にした。俺が異世界の人間だという事、この世界の事、俺が知っている事を全て話した。さすがに富士宮には聞かせられないから一旦席を外してもらったけどな。

「——以上です」

「マンマミーヤ……」

「信じ難い……いえ、信じたくないという方が表現として正しいですね」

「けど真実です」

そうだと分らせる為にわざわざ十代達や三幻魔、異世界とユベル、そしてダークネスの事を話したんだからな。
これで信じてもらえなきゃ困るぞ。

「もしかするとまたこの地で何かが起きようとしているのでーハ…？」

「……………」

鯨島校長はそれからしばらくして閉じていた目を開いて口を開いた。

「…分かりました。信じましょう」

「信じてくださって、ありがとうございます」

「いえ。孝一さんが話した事は確かにここで起きた事と全て符合します。それであなたの話を信じないというわけにはいきませんよ」

ふう…、まずは信じてもらえたみたいだな。

「そうですね。ならば孝一さん、ここで暮らしてみてはどうですか？」

「ここで？」

「ええ。まあ暮らすというよりも保護に近い形になりますが、その方が孝一さんには都合が良いと思うのですが？」

確かにこの世界で居場所が無い俺にとっては願ってもない話だ。

だが、

「いいんですか？」

辛いけど、この地にとって今の俺は謂わば黄色信号みたいなもんだ。そんな奴を鯨島校長は置いてくれるっていうのか？

「構いませんよ。といっても今回の話は当然生徒達には秘密となりますが……」

「それは構いませんよ」

俺もわざわざこの生徒を混乱させたくはないしな。

「じゃあよろしく願いします」

「はい、こちらこそよろしく願いします」

最後に鯨島校長とクロノス先生の2人としっかり握手をして話は終わった。

それから大体15分くらい経った頃、俺は今、富士宮に連れられてデュエル場に来ている。

やっぱり遊戯王の世界に来たんだからここは是が非でも行っておきたい場所だからな。

そしてここに来たならやる事って言ったらやっぱり一つしかないよ

な！

「デュエルディスクの具合はどう？」

「ああ、問題ないよ」

そう、デュエルだ！ちょうどデッキもある事だし、生でソリッドビ
ジョンも見たかったしな！

にしてもけっこう重たいんだよなこのデュエルディスク。

よくこんな物を持ったまま走り回れるよなこの奴らは…。因みに
デュエルディスクは鮫島校長から余ってる物を貰った。パクっては
いないからな。

「じゃあお手並み拝見といきますか！」

「いくぞ！」

「「デュエル！！」」

孝一

LP4000

楓

LP4000

「おつ、富士宮がデュエルするみたいだぜ」

「相手は誰だ？知らねー奴だけど？」

「私服だからたぶん例の漂流者じゃない？」

なんだかあつという間にギャラリーができあがったな。
それにやっぱりここだと私服はかなり目立つみたいだな。

「先行はもうわ、ドロー！」

つと、やばいやばい。今はデュエルに集中しねーとな！

「私はモンスターを1枚にカードを2枚セットしてターンエンド！」

楓

LP4000

手札3枚

まずは様子見つてところか。

さてと、次は俺だな。デュエルなんて何年振りだろうな。
せつかくやるんだから楽しんでやらねーとな！

「俺のターン！ドロー！」

おっ、なかなかのカードを引き当てれたな。
早速いくぜ！

「俺は《ダブルコストーン》を召喚する！」

俺がカード名を宣言してディスクにカードをセットすると、イラストと同じ2体のお化けみたいなモンスターが俺のフィールドに出てきた。

ダブルコストーン

ATK/1700

「《ダブルコストーン》？という事は闇属性デッキね？」

「ああ！バトルだ！《ダブルコストーン》でモンスターに攻撃！」

《ダブルコストーン》が楓の伏せてあるモンスターに向かっていく。
見た目はもう完全にゴーストだな。

「甘いわ！攻撃されたモンスターは《ライトロード・ハンター ライコウ》よ！」

げ！！ライトロード！？

「ライコウはリバーズモンスターで、リバーズした時にフィールドのカードを1枚破壊する能力があるわ！私はそのまま《ダブルコストーン》を破壊！」

破壊される瞬間にライコウが体から放電し、《ダブルコストーン》がライコウと道連れって形で破壊されちゃった。

「ライコウの効果で私はデッキの上からカードを3枚墓地に送る！」

…どうやらあの狼野郎は来なかったみたいだな。
良かった。相手側としてはあれが来るだけでけっこう脅威だからな。

「俺はカードを4枚セットしてターンエンドだ！」

孝一

LP4000

手札1枚

「（4枚もカードを伏せた…？）

私のターン、ドロー！私は《ライトロード・パラディン ジェイン》を召喚！」

うわ…ライコウの次はパラディンかよ。本当にめんどくせーなライトロードは！つーか今更だけど、あいつのデッキってライトロードか！

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK/1800

「更にフィールド魔法、《ジャスティス・ワールド》を発動！」

すると今度は周りの景色がデュエル場から西洋の神殿のようになった。

「フィールド魔法、《ジャスティス・ワールド》が存在する限り、私のデッキからカードが墓地に送られる度にこのカードにシャインカウンターを乗せる！」

「そしてその数につき場のライトロードは攻撃力が1000ポイントアップする、だろ？」

「その通りよ。今は0だから攻撃力は変わらないけどね」

といってもこのフィールド魔法の効力は後からじわじわくるからな。

いつまでも放置しておくのはマズい。

「いくわよ、バトル！ジェインで水高さんにダイレクトアタック！
<ライトロード・スラッシュ>！」

「リバーズカード、《リビングゲッドの呼び声》！俺の墓地からモンスターを1体特殊召喚する！蘇れ、《ダブルコストン》！」

ダブルコストン

ATK / 1700

「攻撃表示？誘ってるの？」

「さあどうだろうな？」

「……いいわ、その誘いに乗ってあげる！攻撃を続行！ジェインで《ダブルコストン》を攻撃！《ライトロード・パラディン ジェイン》はモンスターと戦闘を行う時のみ攻撃力が300ポイントアップする！」

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK / 1800 ↓ 2100

「よし！リバーズカード、《アルケミー・サイクル》発動！俺の場の全てのモンスターの攻撃力を0にする！」

「な、なんですって!？」

ダブルコストン

ATK / 1700 ↓ 0

「っ、ぐあぁっ…！」

孝一

LP4000-2100〃1900

いつってえー！！本当に剣で斬られたみたいだ！！

いくらソリッドビジョンだからケガはしないっていつても、こんなもん何度もくらってらんねーぞ！

「ちよっ…大丈夫！水嵩さん！？」

「ああ、大丈夫だ。それよりも《アルケミー・サイクル》の2つ目の効果を発動する！このカードの効果で攻撃力が0になったモンスターがバトルで破壊された時、俺はデッキからカードを1枚ドロ―できる！」

よし。デッキ回りは良い感じだ！

「あの男、たった1枚の手札補充のために自分からダメージを増やしたやがったぜ」

「バカじゃねえの、あいつ」

ま、端から見たらそう映るよな。

だけど、俺の策はこれで終わりじゃあないぜ！

「この瞬間、俺は更に畏発動！《デモンバルサム・シード》！こいつは戦闘で俺のモンスターが破壊された時、受けたダメージ500ポイントにつき《デモンバルサム・トークン》を1体特殊召喚する罠カードだ！」

「なっ……」

俺が受けたダメージは2100ポイント！
よって…、

「俺は計4体の《デモンバルサム・トークン》をフィールド上に特殊召喚する！」

俺の場に現れた鳳仙花が種を飛ばし、そこから新たに4つの鳳仙花が花を咲かせた。

デモンバルサムトークン×4

DEF/100

「一気にモンスターを4体も揃えた……！！」

「マジかよ……」

予想もしなかった出来事に富士宮を含む周りの奴らは全員啞然としていた。

「ま、まだよ！リバーズカード、《リビングデッドの呼び声》！私は墓地から《ライトロード・スピリット シャイア》を特殊召喚！」

ライトロード・スピリット シャイア

ATK/400

シャイア？聞いた事のないライトロードシリーズだな。

「シャイアは私の墓地にあるライトロードと名のついたモンスター1種類につき、攻撃力が300ポイントアップする！私の墓地には最初に戦闘で破壊された《ライトロード・ハンター ライコウ》とライコウの効果で墓地に送られた《ライトロード・サモナー ルミナス》ね2体がいるわ！よってシャイアは攻撃力が600ポイントアップする！」

ライトロード・スピリット シャイア

ATK / 400 ↓ 1000

「そしてバトルフェイズはまだ終わってない！シャイアで《デモンバルサム・トークン》を攻撃！」

シャイアが杖から雷を放ち、俺のトークンが1体灰となって消えた。

「エンドフェイズ時にジェインとシャイアの効果で私はデッキからカードを4枚墓地へ送る！」

シャインカウンター 0 ↓ 4

これでシャインカウンターが一気に4つか…。

これで全てのライトロードの攻撃力が400ポイントアップする事になる。

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK / 1800 ↓ 2200

ライトロード・スピリット シャイア

ATK / 1000 ↓ 1400

「あつ、まだよ！今の効果処理で墓地に行つた装備魔法、《ライトロード・レイピア》と《ライトロード・ビースト ウォルフ》の効果発動！ウォルフはデッキから墓地に送られた時、私のフィールド上に特殊召喚できる！《ライトロード・ビースト ウォルフ》を特殊召喚！」

ライトロード・ビースト ウォルフ

ATK / 2100 ↓ 2500

「更に《ライトロード・レイピア》はデッキから墓地に送られた時、私のフィールド上に存在する《ライトロード》1体に装備する事ができる！私はこれをジェインに装備して更に攻撃力を700ポイントアップさせる！」

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK / 2200 ↓ 2900

「攻撃力2900…」

「まだよ！」

まだあるのか！？

「今のジェインとシャイアの効果で更に墓地に《ライトロード・エンジェル ケルビム》が墓地に送られた事でシャイアの攻撃力がさらに300ポイントアップ！」

ライトロード・スピリット シャイア

ATK / 1400 ↓ 1700

「私はこれでターンエンドよ！」

楓

LP4000

手札2枚

「……」

うん、詰んでるなこれは…。

攻撃力2500超えのモンスターが2体って、今の俺のモンスターじゃ無理だぞ。

俺もけっこうな数のモンスター（トークンだけど）を一気に揃えたけど、これはもうレベルが違う。

やっぱりライトロードの鬼畜さは半端ねー！

「…ふう…」

俺の残りLPは1900。現時点で壁にトークンが3体いるといつてもそれはライトロード相手にはまったく通用しないと云っていいでも、別に諦めたわけじゃない。

確かに現状は完全に詰みに入っちゃってるけど、それと俺の考えはまったく別の話だ。

このまま防御に回っても勝ちの目は無い。しかしこれは逆を言えば、このターンならまだ逆転のチャンスがあるって事だ。そして俺のデッキにはそれを可能にするカードがある！

だけど、今の俺の手札にはその決定打になるカードは無い。だったから…、

「……………」

だったら、このドローでそいつを引き当てるしかない！
これが本当に俺が使っていたデッキなら、きっとあのカードを引き
当てられるはずだ！

「よし、いくぞ」

チャンスは一度きり！
来い！！！！

「ドローー！！」

……。

…っ、来た！

「よし！勝負はまだ終わってない！いくぞ、富士宮！」

「……」

「まずは魔法カード、《地砕き》！相手の場に存在する守備力が一
番高いモンスターを破壊する！」

「くっ、シャイア……」

シャイアが一番守備力が高いモンスターだったのか。

「続いてリバーiscard、《ナイトメア・デーモンズ》を発動！このカードは自分のモンスターを1体リリースして相手の場に《ナイトメア・デーモン・トークン》を3体攻撃表示で特殊召喚するカードだ！」

「っ！？自分のモンスターを捨てて…」

「相手の場にモンスターを召喚するだっ！？」

俺の場の《デモンバルサム・トークン》が1体消え去り、代わりに富士宮の場に3体の幽霊みたいな悪魔族モンスターが出てきた。

ナイトメア・デーモン・トークン×3

ATK/2000

「なに考えてんだあいつ！」

「わざわざ相手のモンスターを増やすだなんて…」

「一体何をする気なの…？」

そしてこいつが俺の逆転のカード！

「俺は場の《デモンバルサム・トークン》2体をリリース！」

「リリース…？」

「なんだリリースって？」

つと、やば…。

そういえばこの時代はまだリリースじゃなくて生け贄だったっけな
んゝまあこれくらいは大丈夫か。
それより、いくぜ！

「現れる！《破壊竜ガンドラ》！！」

先程に続いて2体の《デモンバルサム・トークン》が消え去り、今度は俺の背後から体中に赤い宝石？が埋め込まれた漆黒のドラゴンが現れた。

破壊竜ガンドラ

ATK/0

「なっ…！」

「レベル8で攻撃力0のモンスターだと！？」

これがソリッドビジョンのガンドラか。…カッコいいな。

「俺は《破壊竜ガンドラ》の効果発動！LPを半分支払う事でフィールドのガンドラ以外のカードを全て破壊し、ゲームから除外する！」

「なっ…！」

「くられ、<デストロイ・ギガ・レイズ>！」

効果名を叫ぶと、突然ガンドラの体にある宝石が全て輝き出し、辺り一体が禍々しい程の赤に染まった。次いで、周りのモンスター達が赤い光に耐えきれずに次々と散っていく。

数秒もすると、フィールドはガンドラを残して完全にがら空きの状態になっていた。

楓

LP1600

「え？な、なんで私のLPが…？」

「《ナイトメア・デーモンズ》の効果だ。《ナイトメア・デーモン・トークン》が破壊された時、そのコントローラーに800ポイントのダメージを与える！」

つまり富士宮はガンドラの効果で自分の場にいた《ナイトメア・デーモン・トークン》が3体全て破壊されてしまった事によって《ナイトメア・デーモン・トークン》3体×800ポイント、計2400ポイントのダメージを受けたというわけだ。

「言っとくけど、これで終わりじゃないぞ。《破壊竜ガンドラ》は自身の効果で破壊したカード1枚につき、攻撃力が300ポイントアップする！」

「なん、ですって…！」

破壊したカードの合計はトークンを合わせて7枚。

よってガンドラの攻撃力は…、

破壊竜ガンドラ

ATK/0↓2100

「攻撃力2100…！」

富士宮のパラディンやビーストには到底及ばないけど、このデュエルのフィニッシャーとしては充分だ！

「バトル！《破壊竜ガンドラ》でダイレクトアタック！えっと……」

再びガンドラの宝石が赤く光ると、周りに放出される<デストロイ・ギガ・レイズ>の時とは違ってエネルギーはガンドラの口に集まっていくな。最終的にそれはエネルギー弾という形になって、ガンドラの口の前で形成された。

「<デストラクト・フレア>！」

そう攻撃の宣言をした直後、ガンドラは富士宮にそのエネルギー弾を放った。

「きゃあああああああ……！！！」

攻撃はカードで防がれる事なく楓に直撃し、楓のLPを根こそぎ奪い取った。

楓

LP 1600 - 2100 = 0

「うし！」

逆転勝利！

懐かしいな、勝った時のこの気分！

ん？なんだ富士宮のやつ、地べたに座り込んで……。
しょうがねーな。

「ほら、大丈夫か富士宮？」

「う、うん。ありがとう」

「…にしてもお前、すげーつえーな！最後のドロでガンドラが来なかったら、俺負けてたぜ？」

「ううん、そんな事ないよ。それだったら私だって、まさか1ターンキルされるとは思わなかったもん」

1ターンキルに関してはLP4000制のこの世界だからこそできた技だけだな。

LP8000制じゃそうそう1ターンキルなんてできねーからな。それにまあ運が良かったつてのもあるしな。

とにかく俺が今言える事は一つだ。

「いいデュエルだったぜ、富士宮！」

「……………楓」

「うん？」

「これから私の事は楓って呼んで」

なんだ急に？

…楓、ね……。

「わかった。なら、俺の事も水嵩さんって言うのは止めてくれ」

「え？」

保険室の時から思ってたけど、水嵩さんってのはどーも堅苦しい感じがして嫌だったんだよな。

「じゃあなんて呼べば…？」

「水嵩さんでなければ好きに呼んでいいよ」

「…………じゃあコウ」

「コウ？」

なんだそりゃ？

「《水嵩 孝一》でしょ？だからコウ」

ああ、孝一の“孝”をカタカタ変換したのか。
コウ、か…………いいかもしれねーな。

「よし！じゃあ改めて、いいデュエルだったぜ、楓！」

「うん！またデュエルしようね、コウ」

こうして俺のアカデミア生活が幕を切って落とされた。

第1話「水嵩 孝一」（後書き）

という事で後書きです。

前作と同じキャラクター、同じデッキだと思わないので大幅に変えました。

まあ文才が無いのは相変わらずですが……。

では、また次回！

第2話「似た者同士は敵同士」(前書き)

第2話です。

シンクロの登場はまだまだ先になりそうです。

第2話「似た者同士は敵同士」

「孝 side」

「あぢ〜…」

「暑いねえ」

あちー。

日差しがあちーよバカヤロー。

今日の気温は32。おまけに昨日の夜に雨が降ったから、外は今すぐゲームシムシしてやがる。

冗談じゃねーよ。頭痛持ちの俺にとっては暑いだけでもかなりキツイってのに、まるで地獄だ。

「はあ〜…で、話を戻すけど、誰だっけ？俺に話がある奴って？」

「んと、私の友達で《綾瀬^{あやせ}加奈（かな）》っていうの。一体どんな話かは分かんない。直接話したいって言うてたから」

「ふう〜ん…」

一体何の話かは知らないけど、新参者の俺に用って一体どんな事なんだろうな。ま、あんまり面倒な事じゃなけりゃいいんだけど…。

「うふふ、もしかして愛の告白だったりして？」

「は？」

なんでそうなる？

「だって会って直接話したい事って言うたらずは告白じゃない？」

「アホかお前は…」

なんで見ず知らずの女子に告白なんてされなきゃいけないんだよ。
あり得ないあり得ない。

「もう、冗談よ冗談。はあ…それにしても暑いなあ」

冗談はいいとして、本当にあちーな。

ああもうなんでこんなに暑いんだよ！

（夏だからです。）

「……あれ？」

「うん？」

ブルー寮まで続く道を歩いていると、道のと真ん中で一台のワゴンが立ち往生していた。後ろではワゴンの持ち主であろう人が必死になって車を押している。

「あれ、トメさん？」

っ！？トメさんだと！？

「おや？楓ちゃんじゃないかい」

楓を見たメガネをかけたおばちゃんが笑って挨拶してきた。す、すげー！！本物のトメさんだ！！やべ、今俺ちよつと感激してるわ！クロノス先生に鮫島校長と続いてアカデミアの有名な人会えるだなんて夢じゃないけど夢みたいだ！

「今日はお出掛けかい？」

「ううん、ちよつとブルー寮まで彼を連れて行く途中なの」

そう言つて楓は右手を俺に向けた。

「《水嵩 孝一》っていいいます。よろしく願ひします」

「まあ礼儀正しい子だねえ。じゃあ、これからは孝一君って呼ぼうかねえ」

「ところでトメさんはここでなにしてるんですか？」

「ああそうそう！それがねえ…「うゝんトメさん、やっぱり動きませんよ」やっぱりダメかい？」

突然ワゴンの運転席のドアが開いて中から長髪の若い女の人が出てきた。

「つかまたまたアカデミアの有名人のご登場だし！

「あれ？楓ちゃんじゃない。それとあなたは…誰？」

「《水嵩 孝一》っていいいます。よろしく願ひします」

「ああ！君が噂の漂流者君ね！私はアカデミアの売店で働いてる《

セイコ《 っ ていいいます。よろしく、孝一君！》

「はい、こちらこそよろしく願ひします」

さてと、自己紹介はこれくらいにして、

「それで2人は一体ここでなにしてんですか？」

「ああえつと、売店の商品をワゴンで運んでる最中にタイヤがぬかるみにはまっちゃつて、動かなくなつちやつたんですよ！」

タイヤ？つて、あゝ本当だ。ガツチリはまつてゐるわ。
これは女の力じゃ無理だわ。

「それでどうにか動かそうとしてゐるんだけど、この通りピクリとも
しなくてねえ…はあ、こまつたねえ…」

なるほどね…。

ま、それなら、

「それなら、俺がやりますよ」

「「「え？」「」「」

「要はこのぬかるみから押し出せばいいんですよね？」

「そうだけど、で、でも何十？もあるワゴンなんですよ！？それを
押し出すなんていくらなんでも無茶ですよ！」

「そつだよコウ！」

普通なら確かにそうなんだけど、

「ま、いいから見ててください」

じゃあパッと終わらせますか。

「よし、せーの…っ、ふんっ！」

ズルン…！

「「「！…！」「」」

「えっと、これで大丈夫ですか？」

「え、ええ…」

ふう…やっぱワゴン車だけあって、けっこう重かったな。ま、ち
やんとぬかるみからは出たし、これでOKかな。

「はあ、すごい力持ちなんだねえ」

「ホント、ビックリしちゃった…」

「いや、昔から腕っぷしだけは無駄にあるんですよ」

それでよく力仕事とかもやらされてたから余計に力がついちまったんだよな。

「いやぁありがとうね孝一君！はい、お礼にドロパン1つ、プレゼントだよ！」

「うわ！ありがとうございます！」

ラッキー！まさかのドロパンをゲットしちゃったよ！

「はい、楓ちゃんも！」

「え？でも、私は……」

「いいのいいの！いつも売店を利用してくれてるんだから、サービスだよ！」

「あ、ありがとうトメさん！」

「じゃあ2人とも、気を付けてね！売店に来た時は改めてサービスするよ！」

「またね、2人とも！」

トメさんとセイコさんはそう言うのと、ワゴンに乗ってあっという間に見えなくなった。

2人ともすげー元気な人だったな。そうだな、今度売店に行ってみるか。

「さてと、じゃあさっさとブルー寮に行こうぜ？楓」

「あ、うん、そうだね！」

ブルー寮か。

一体どんな奴らがいんのかな？

「ここがブルー寮だよ」

「……………」

ブルー寮に到着して、まず言った最初の一言。

「お城かよー！」

外観は本当に何処かの国の巨城と言っていい造りだった。
こりゃブルーの生徒達のプライドも無駄に高くなるわ。完璧アカデ
ミア側の設計ミスだろこれは…。

「すごいよねー。これがブルーの寮なんだよ？」

「いや、すごいなんてもんじゃねーよ」

驚き過ぎて言葉が見つからねーから。

「…とにかく中に入ろう」

ずっとこんなところに突っ立ったまま寮を眺めていても意味ねーしな。

「じゃあ待ち合わせ場所を食堂にしてるから行こっか？」

「ああ」

さてと、俺に話がある綾瀬って子は一体どんな子なんだろうな。

・ 10分後

「いねーのか？」

「いないねえ…」

楓に連れられて食堂に来たはいいものの、綾瀬って子はいなかった。なんで呼び出した本人がここにいねーんだよ！

「楓、本当にここで合ってたのか？」

「うん」

なら遅刻が用事が、とにかく何か入ったか。

「どうする？」

「どうするも何も本人がいないんじゃない話なんてできねーしな…」

ん〜それじゃ…、

「ブルー寮の中を歩いてこようかな」

ブルー寮の中を見て回りたいし、もしかしたら途中で綾瀬って子に会うかもしれないしな。

何よりブルー寮の中ってすげー涼しーんだよ。まだあの灼熱地獄の中には戻りたくない。

「じゃあ少し歩こっか」

「ああ」

「大体これで全部かなあ」

「そっか」

あれから20分くらいかけて俺達はブルー寮の中を一通り見て回った。

にしても、本当にすげーな。外観もさることながら中もめちゃくちゃ豪華な作りだった。

各所には立派なシャンデリアがあっし、上流階級思想みたいなもんが浮き彫りになってんのな。

ま、それはいいとして、遂に綾瀬って子には出くわさなかったな。

これだけ広い寮だから仕方ないと言えば仕方ないけどさ…。

「…………あれ？」

そんな時だった。

突然目の前を歩いていていた楓が立ち止まったのは…。

「っ、とつと…。どうした？」

「なんかあそこに人だかりが…」

「え？」

…本当だ。

ホールの中央に人だかりができてる。
何かあったのか？

「どうせだから行って見てくるか」

このまま寮に戻ったって特に何にもないしな。
そう言っただけ俺達はそのまま人だかりの方に歩いていった。

「すみません。何かあったの？」

「ん？ああ富士宮か。ほら、見てみれば分かるよ」

「…？」

人だかりのせいで前が見えないんだけど…。
仕方ないな。

「ちょっと失礼」

「ごめんなさい」

人の群れを掻き分け掻き分け、前に進んで一番前に出ると、次にとんでもない光景が目の前に広がった。

「あっ……うっ」

「くっ……そお……」

「たくっ、もう少し骨のある奴はいねーのかよ！」

「……………！」

これは……！

『よえーな』

『お前、本当にこいつらのリーダーかよ？』

『よえー奴はそのまま失せろ！』

っ……！

ちっ、嫌な事思い出しちゃった。

「っ、加奈!？」

「ん？」

突然楓がそう叫ぶと、倒れている女子生徒の元に駆け寄っていく。
加奈って事は、あの子が綾瀬か？

「大丈夫、加奈？」

「あ…楓ちゃん…」

「どうしたの一体？」

「あの人がいきなりデュエルで私達を……」

綾瀬が指で目の前の男子を指差した。

「なんだ、てめえら？」

おーおー、如何にも悪そうな奴だな。
それにしてもこれまた見事な赤髪だな。

「一応確認しとくけど、これを行ったのはお前か？」

「はっ？だったらなんだよ？」

「悪い事は言わない。今のうちにこいつらに謝っとけ」

「はあ？なんで俺が俺より弱い奴に謝らないといけねーんだよ？」

『なんで俺が謝らねーといけねーんだよ!』

ちっ、たくっ、いちいち嫌な事を思い出させてくれる野郎だなこいつは…。

「年上の言う事は素直に聞いとくもんだぜ？」

「はん、くっだらねー」

…やっぱ今は何言っても聞かないか。
はあ…、しょうがねーな…。

「楓、今すぐ倒れてる奴らを全員どけてくれ」

「え？」

「あん？」

2人の疑問符を無視して俺はデュエルディスクを起動し、前に出して構える。

「お前のその腐った性根叩き直してやるよ」

「てめえ…上等だ！てめえもこいつらと同じ風にしてやるよ…」

「はっ。それはこっちのセリフだ！」

「デュエル!!」

孝一

LP 4000

ブルー男子

LP 4000

「先行は俺がもらっぜ、ドロー! 《クリッター》を守備表示で召喚!

クリッター

DEF / 600

「カードを1枚セットしてターンエンドだ!」

ブルー男子

LP 4000

手札4枚

まずは《クリッター》で様子見か。

あれだけじゃデッキの特定は無理だな。

「俺のターン、ドロー! 《ダブルコストーン》を召喚!」

ダブルコストン

ATK / 1700

今日も頼むぞ、《ダブルコストン》！

「バトル！《ダブルコストン》で《クリッター》を攻撃！」

「っ、消えた…？」

なんだ？あいつの言う通り、突然が俺のフィールドから消えちまった…。
一体何処に…？

『ヒューヒヒヒ！！』

「どおお！」

…と思った直後、いきなり《クリッター》の目の前に飛び出してきた。
《クリッター》はというと、突然の事に驚いた顔をしながら破壊された。

「……………」

いや、どんな攻撃方法だよ！
驚かせて破壊するって、やってる事がイタズラ好きのお化けと何ら変わらねーだろこれ！

「くそっ、ビックリさせやがって…。だが、《クリッター》はフィ

「ルドから墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを1体手札に加える事ができる！」

「俺はカードを2枚セットしてターンエンドだ！」

孝一

LP4000

手札3枚

「俺のターン、ドロー！よし、いくぜ！魔法カード、《手札断殺》を発動！お互いに手札のカードを2枚墓地に捨てて、その後、デッキからカードを2枚ドローする！」

手札換えか。

あゝよし、この2枚を捨ててドローっと、…おつ、なかなか良いカードが回ってきたな。

さて、あいつはどうだ？

「……………」

引いたカードを睨んでるな。

何か来たのか？

「…………ククク」

っ…！笑った…！？

「いいぞ…いいぞ！最っ高の手札だ！この手札で、てめえをぶちのめしてやるよ！」

「へえ〜面白そうだな。なら、やってみるよ?」

「……ちつ、いいぜ、なら見せてやる!《神獣王バルバロス》を召喚!」

神獣王バルバロス

ATK/1900

うげ、バルバロス……!!

こいつ、バルバロスをメインにしたパワーデッキか!

「出た…バルバロス…」

「気を付けて…。皆、このモンスターに倒されたんです」

「《神獣王バルバロス》はレベル8のモンスターだが、生け贄無しで召喚できる!ただし、生け贄無しで召喚した場合、元々の攻撃力は1900になるけどな」

けど、バルバロスを出したという事は当然デメリット対策のあのカードを使ってくるはず…!

「更にリバースカードオープン!《スキルドレイン》!LPを1000ポイント払い、フィールド上の効果モンスターの効果を全て無効にする!」

神獣王バルバロス

ATK/1900↓3000

ほら出たよ!

対戦相手泣かせのバルバロスと《スキルドレイン》のコンボ！
昔、このコンボで何度殺られた事か…。…はあ…。

「いくぜ！バルバロスで《ダブルコストーン》を攻撃！<トルネード・
シェイパー>！！」

「…っ、ぐうううっ、くっ…！」

孝一

LP4000 - 1300 = 2700

…いつてえな！

たくっ、ダイレクトアタックでもねーのになんて衝撃だよ。おまけ
に《ダブルコストーン》まで破壊されちゃった。

「ようし！カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

ブルー男子

LP3000

手札3枚

「俺のターン、ドロー！…！！」

こいつが来たか！

確かにこいつの力なら、奴のバルバロスを倒せる！

けど、まだこいつは出せねーな。

だったら…、

「魔法カード、《トレード・イン》！手札のレベル8のモンスター
を墓地に捨て、デッキからカードを2枚ドロウする！俺は手札の《

破壊竜ガンドラ》を墓地に…！」

「ガンドラを墓地に…！？」

「あいつ、ガンドラなんてカードを使ってるのか！」

ガンドラなんてってなんだよ？

ガンドラ嘗めんじゃねーよ！

「俺はこれでターンエンドだ！」

孝一

LP2700

手札4枚

「なっ…！」

「手札を入れ替えるだけで…！」

「何もしないだと！？」

「てめえ…何のつもりだ？」

クク…まったく、血の気の多い奴だな。

「安心しろ。どんな勝負だろうと、途中で戦いを投げ出したりしねーよ」

「そうか。なら、遠慮なくいくぜ！俺のターン、ドロー！《可変機獣ガンナー・ドラゴン》を召喚！」

可変機獣ガンナー・ドラゴン

ATK / 2800

バルバロスに続いて今度はガンナー・ドラゴンか。
とことんパワーで押し進める気だな、こいつ。

「ガンナー・ドラゴンもレベル7だが、バルバロスと同じ生け贄無しで出せるモンスターだ。そしてこの方法で出した場合、元々の攻撃力が半減する……が、——」

その効果は《スキルドレイン》で無効となる、か……。
まずいな。これ以上高攻撃力のモンスターを出されたら、俺じゃ対応しきれなくなる。

このデュエルの活路は見出だせたんだ。なんとか踏ん張らねーと！

「バトルだ！《可変機獣ガンナー・ドラゴン》でダイレクトアタック！<ダブルモーター・カノン>！」

「させねーよ！リバーズカード、《ガードブロック》！このバトルで発生するダメージを0にして、俺はデッキからカードを1枚ドロ―する！」

「小癪な……だが、こいつで終わりだぜ！バルバロスでダイレクトアタック！<トルネード・シェイパー>……！」

「いけない！この攻撃を受けたら孝一さんの負けです！」

「コウ……！」

いや、まだ終わらねえぜ！

「手札の《バトルフェーダー》のモンスター効果発動！相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する！」

「なに！？」

俺のフィールドに鈴？を着けた振子みたいなモンスターが出てきた。

バトルフェーダー

DEF / 0

「上手い。バトルを終了させたばかりか壁モンスターまで特殊召喚するだなんて……」

「ちいつ、しつこい……！」

「お前を倒すまでデュエルを諦める気はねーよ」

「くっ、ターンエンドだ！」

ブルー男子

LP 3000

手札3枚

ふう…。

なんとかこのターンは凌いだな。だけど、やっぱり《スキルドレイン》は厄介だな。あのカードの前ではガンドラもまったくの無力だからな。

だからこそこのカードを入れてるわけだけど、…いや、わりい、ウソ。四分の3くらいは俺の趣味で入れてるだけだ。

「俺のターン、ドロー！モンスターとカードを1枚ずつセットしてターンエンドだ！」

孝一

LP2700

手札3枚

「ククク、なんだかんだ言ってもやっぱり防戦一方ってか？俺のターン！《不屈闘士レイレイ》召喚！」

不屈闘士レイレイ

ATK/2300

次も案の定パワーモンスターか。

「更に装備魔法、《メテオ・ストライク》！こいつをバルバロスに装備だ！一応説明しとくが、《メテオ・ストライク》を装備したモンスターは貫通効果を得る！」

これでバルバロスは攻撃力3000の貫通効果持ちモンスターに化けたわけだ。

クク、もう笑うしかねーよ。

「バトルだ！《可変機獣ガンナー・ドラゴン》で《バトルフェーダー》を攻撃！<ダブルモーター・カノン>！」

「っ、簡単にはやらせねーぜ！リバースカード、《ヘイト・バスタ

「！自分フィールド上の悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる！相手の攻撃モンスター1体と攻撃対象となった俺のモンスター1体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手LPに与える！」

「やらせるかよ！カウンター罠、《神の宣告》！LPを半分支払い、相手のカード効果を無効にし、破壊する！」

「なに…！」

ブルー男子

LP3000 - 1500

くそつ、《ヘイト・バスター》は失敗したか…！
それに、

「…自身の効果で特殊召喚された《バトルフェーダー》はゲームから除外される」

「さてと、今の気分はどうだ？お前が伏せたそのモンスターの守備力が300以下なら、バルバロスの貫通効果でお前は負けるんだぜ？」

はっ。今の気分ねえ…。

「そうだな…。強いて言えば、次のターンでお前は終わりってところだな」

「は？意味わかんねー！答えになってねーし、そもそもお前に次のターンなんかねーよ！」

「どうかな？俺をあんまり甘く見ねー方がいいぜ？」

「くっだらねー。もう終わりにしてやるよ！《神獣王バルバロス》でモンスターを攻撃！消えろ！<トルネード・シェイパー>！！」

「ふん。速攻魔法、《月の書》！」

「！？」

「選択したフィールド上のモンスター1体を裏側守備表示にする！選択するのは当然、バルバロス！」

バルバロスが叫び声を上げながらフィールドから消えた。

ま、消えたっていうか裏守備にしたから姿を隠しただけなんだけどな。

「（くそつ、バルバロスを破壊してダメージを回避するのではなく、表示形式を変更する事でダメージを免れるとは…）
だったら、レイレイで攻撃！」

「……っ、だが、破壊された《終焉の精霊^{ジ・エンド・スピリッツ}の効果発動！」

「なっ……！？モンスター効果は《スキルドレイン》で使えないはずだ！」

「お前、テキストちゃんと読んだのか？《スキルドレイン》が無効にするのはフィールドで発動したカード効果のみ！つまり、墓地で発動する効果には対応してねーんだよ！」

「ッ!!」

《スキルドレイン》の持つ唯一の穴とでも言うべき欠点。
フィールド以外で発動する効果にはまったく対応する事ができない!

「《終焉の精霊》の効果発動!このカードが破壊され、墓地に送られた時、除外されている闇属性モンスターを全て墓地に戻す!」

つつても、除外されてるカードは《バトルフェーダー》1枚だけだけどな。

「惜しかったな。《神の宣告》を《ガードブロック》じゃなくて《月の書》に対して使ってれば、お前の勝ちだったぜ?」

「~~~~~!!」

さてと、それじゃあそろそろ本当に終わらせるか。

「俺のターン、ドロー!魔法カード、《天使の施し》を発動!」

「なに!?!」

「デッキからカードを3枚ドローし、その後、手札を2枚墓地に捨てる!」

ん?俺のデッキに《天使の施し》が入っている事が不思議か?
んと、ほら、さっきトメさんからドローパン貰ったろ。あのパンの中に入ってたんだよ。

因みに楓のドローパンの中身はたくあんだった。

…まあ腹を壊さない事を祈ろう。

「だが、今更カードを入れ替えたところで、俺に勝つことは絶対に不可能だ！」

「フツ…いい事教えてやる。世の中にはな、“絶対”なんて言葉の方こそ絶対にねーんだよ！」

いくぞ！

こっから反撃開始だ！

「このモンスターは墓地の闇属性モンスター7種類をゲームから除外する事で特殊召喚できる！」

「なんだと…！」

こいつがガンドラに次ぐ、第2のエースモンスターだ！

「さあ来い！《究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴン》！」

突風を巻き起こしながら俺の背後から1体の巨大な黒いドラゴンが出てきた。

究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴン

ATK/4000

「な、なんだこいつは…！？」

「フツ…！」

「攻撃力4000！？」

対戦相手のブルー男子と綾瀬、楓の3人が各々声を上げた。ま、この世界じゃ単体で攻撃力4000クラスのモンスターはたぶん化物レベルに近いんだろうな。

「そ、それに、レインボー・ドラゴンって…！」

「レインボー・ドラゴンは《ヨハン・アンデルセン》のエースモンスターのはずです！」

そっぴやそっぴちもあつたな…。

「お前、なんでレインボー・ドラゴンを…！」

「そりゃ秘密だ」

んな事言えるわけねーだろ。

俺が異世界の人間だなんて、口が裂けても言えねー。

「速攻魔法、《サイクロン》！お前の最後の伏せカードを破壊する！」

「くっ…」

《サイクロン》があいつの伏せカードを吹き飛ばした。破壊したカードは《聖なるバリア ミラー・フォース》だった。

「ミラー・フォースだったか…」

「くっ、くそっ…」

これであいつの場にはもうレインボー・ダークの攻撃を防ぐ手立ては無い！

これで決着だ！

「いくぞ！《究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴン》で《不屈闘士レイレイ》を攻撃！<レインボー・リフレクション>！！」

「う、うおおおおおおお！！！！」

レインボー・ダークの首の宝玉が順々に光ると、レインボー・ダークが虹色の光線を放ち、あいつのLPを残さず消し去った。

ブルー男子

LP1500 - 4000〃0

「か…勝った…？」

「勝った…！」

「おおおっし！！」

っ！！？

ビックリした！急に騒ぐなよ！

「コゝウ！」

「ん？」

楓？

く楓sideく

「コウ！」

「ん？」

「イエーイ！」

ハイタッチ！

私が駆け寄ってそう言つと、コウは素直にハイタッチしてくれた。

「すごいよコウ！まさか本当に勝っちゃうだなんて！」

「ん。今回は少し真面目にやったからな」

しれつと答えるコウだけど、私は未だに興奮してる！

勝った事ももちろん驚いたけど、やっぱり一番の驚きはコウが最後に召喚したあのレインボー・ドラゴンよね！

たった一撃であの状況をひっくり返しちゃったよ！

後でコウにデュエルしてもらおうかな？あつ！それにレインボー・ドラゴンの事も聞いてみよう！

「う…嘘だ…。俺が…負けた…？」

あいつはというと、コウに負けたのが相当ショックだったのか、両膝を地面に付いて頂垂れていた。これで少しは反省したかな？

「お前以上に強い奴なんてザラにいる。そう落ち込むなよ」

「ッ！お前なんか何が分かる！！」

「分かるさ。俺もそうだったからな」

え？

⌈
⋮
?
⌋

「コウ？」

なんだろう。なんかコウの様子が変。

表情が暗い…。

「ふつ、ぶざけんじゃねええええええええええ！！！」

「コウ！」

ついにキレた！

コウが殴られる！

「はあ……止せ」

ってコウが呟いた次の瞬間には右腕を背中に回された状態で、コウにいつも簡単に地面に叩き伏せられていた。

「ぐあつ！」

「デュエルでならともかく、殴り合いの力勝負で俺に勝とうなんてまだ3年早い」

「うつ、くつ…そ……」

す、すご…！

全然動きが見えなかった！

一瞬の間に何をしたの一体？

「クク、本当に…そつくりだな、お前…」

「あア？」

「お前、名前何て言うんだ？」

「は？」

「名前だよ。お前の名前」

あつ、そういえばコウはあいつの名前を知らないんだっけ？

「コウ、そいつの名前は…」

「楓。俺は今、こいつに聞いてるんだ。お前に聞いてるんじゃない」

「あつ…あの、ご、ごめんなさい…」

そつだ、何をしてるのよ私ったら。

自分であるから自己紹介なのに…。

で、でも、あいつが素直に答えるかな？

「……人の名前聞くときは、まずは自分からだろ？」

「ん？ああそりゃそうだな、わるいわるい。俺は《水嵩 孝一》だ」

「ふん、…俺の名前は、《矢嶋幸毅》だ」

「「！！」」

あ、あの矢嶋が自分で自己紹介した！？信じられない！

「うそ…」

「そうか。悪かったな、長い間拘束してて…」

「……っ！」

拘束解いちゃったけど、大丈夫かな？

ああなんでこんなにハラハラするんだろ…。

「……ちっ」

よ、良かった。すぐに帰ってくれるみたい。

「矢嶋アー！！」

「………」

「俺はお前を逃がさねーからな！」

「……？」

「……コウ？」

逃がさないって…何が？

なんか、今日のコウは少し変。

〈孝—side〉

《矢嶋 幸毅》か…。面白そうな奴を見つけたな。

「……コウ？」

「ん？ああ楓か。そっぴいやさっきは悪かったな」

「え？」

「ほら、自己紹介の時に少しキツイ言い方をしちゃっただろ？」

それに少し怖がらせちゃった気もするしな。

しつかり謝つとかないと！

「うっん、大丈夫。あの時は私が悪かったんだもん。怒られて当然だよ」

どうやら本当に気にしてないみたいだな。良かった。
でも、ま、やっぱり謝っとくか。

「そっか…。ま、それでも一応な。悪かった」

「うん！」

よし、これようやく本題に戻れるな。

「さてと、君が綾瀬か？」

「えっ、は、はい！そうですけど？」

「楓に君が俺に話があるって聞いたんだけど？」

途中で話が飛んでしまったが、そもそも俺が今日このブルー寮に来たのは、目の前にいる綾瀬っていう子の話を聞きに来たからだ。なんで待ち合わせ場所の食堂にいなかったのかは、まあ仕方ないとして、話はちゃんと聞いていかないとここに来た意味が無い。

「加奈、この人が前に話した『水嵩 孝一』さんだよ」

「は、はい。えっと、私は『綾瀬 加奈』といいます。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。それで話つてのはなんなんだ？」

「あっ、はい。えっとですね…」

……

第2話「似た者同士は敵同士」（後書き）

《究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴン》を投入したわけはぶつちやけ個人的に闇属性モンスターの中でも2〜3番目くらいに好きなモンスターだからです、はい。8割り方はこれが理由です。後はまあヨハンへの布石になればいいかなという思いからです。適当ですんません。

では、また次回。

第3話「ミイラ男と少女？」（前書き）

久々に更新です。

綾瀬のキャラが若干壊れます。

第3話「ミイラ男と少女？」

（孝一 side）

俺と楓は今、ブルー寮の大広間の入口の前に来ている。

扉の向こうからはだいぶ前からガヤガヤと騒がしい声が絶えず聞こえてくる。

「たくつ、なんで俺がこんな事しなくちゃいけねーんだよ」

しかもこんな恰好で…！

「まあまあ。乗り掛かった船なんだし。それに私はすごく似合ってると思うよ」

そんな事言われても素直に喜べねーよ。つーか嬉しくねーよ。似合ってるも何も、お前これ…、

「俺の姿なんて、ほとんど原形留めてねーじゃねーかよ！」

そう叫ぶ俺の今の恰好は全身を包帯でぐるぐる巻きにされた状態、いわゆるミイラ男の恰好だった。もちろん俺が自分でやったわけがない。俺にそんな自虐的な趣味はねー。

「そんな事ないよ。似合ってる似合ってる……ぶっ」

「…お前笑ったな？今普通に吹いたな？」

ジロツと睨め付けるが、この恰好のせいで効果は無かった。そんな

に笑えるならお前もミイラ男ならぬミイラ女にしてやろつかと思っ
たが、さすがにそれは可哀想だから止めておこう。

因みに楓の恰好は制服？つばい上着にミニスカート、頭に被ったと
んがり帽子、そして極めつけに柄の長い簪。

そう、楓の恰好は魔女だ。

本人曰く、「可愛い見習い魔女っ子」（という設定）だそうだ。そ
れを聞いて、一瞬病院で頭の中を調べて来いと、本気で思っ
てしま
った。

ま、可愛いのは認めるけど。

「そろそろかな？」

「多分な」

今回の出来事。

事の始まりは昨日の矢嶋とのデュエルが終わってからだ。

綾瀬から聞いた話によると、なんでも綾瀬の家はけっこうな資産家
で、年に一度近くの幼稚園の子供達の為に仮装パーティーを開いて
いるのだそうだ。本当ならいつものようにその幼稚園でパーティー
を開くはずだったのだが、綾瀬のお父さんが（要らん）気をきかせ
て場所を自分の娘が通っているここ、デュエルアカデミアにしてし
まったのだ。

しかも、鮫島校長はあろう事か、“面白そうだから”という理由で
快く引き受けてしまった。それを知った綾瀬は急遽仮装するメンバ
ーを決める為に鮫島校長に相談したところ、鮫島校長は（何故か）
俺を推薦しやがったというわけだ。

「皆、喜んでくれるかな？」

「不安か？」

「そういうわけじゃ…」

「バレバレだよ」

たくっ、分かりやすい奴だな。
不安だって顔に出てるぞ。

「不安になる必要はねーよ」

「え？」

「例え失敗しても、それをチャラに出来るくらい面白いものにすり
ゃいいんだよ」

「…「ウ…」」

不安を取り除くように笑って答える。
心なしか、若干表情が緩んだように見える。

「今の恰好で言われても、あんまり説得力ないよ」

「……………」

少しでもこいつを元氣付けてやろうとした俺がバカだった！！！！

「もう知らん！勝手にしろ！」

「あっ！「ウ！」」

丁度予定通り扉が開いて、俺はそのまま扉の向こうに歩いていった。

「……………ありがとう、コウ」

最後に楓がそう呟いた事に、当然俺は気付く事は無かった。

その後もごちゃごちゃと仮装したまま質問コーナーをしたり、子供達にお菓子を配って回ったりし、パーティーもそろそろ終盤に入ってきていた。

「つ、疲れた…」

思っていた以上にこの恰好は動き辛かった。

おまけにお菓子を渡す為に近づく度にガキ…ごほん、子供達に体中に巻かれた包帯を引っ張られるもんだからたまったもんじゃない。お菓子配りが終わった頃には、俺でさえだいぶ息が上がっていた。

「はぁ…密かに体力には自信があっただけだな…」

子供達の体力は無尽蔵だった。

因みに楓は今もたくさんの子供達に囲まれながら、お菓子を配り続けている。

「良い笑顔じゃねーか」

あれなら心配する必要はないな。

俺はもう少し休ませてもらおう。

「……………ん？」

と思ったのも束の間、楓達がいる方とは別の方を見てみると、少女が1人、ひっそりとそこに立っていた。

少女は何もせず、ただ楓と子供達の事を食い入るように見つめている。

「……………」

どうして見てるだけなんだ？
入りたいなら入りゃいいのにな。

「しょうがねーな」

あのままじゃ可哀想だし、なによりこのまま何もしなかったらきつと、いや確実に終わった時に寝覚めが悪くなる。

「よオ」

「！」

「どうしたんだ？こんな所で」

「……………」

無視、か。

いや、ちゃんと俺を見てるから無視してるってわけでもないか。

「君の名前は？」

「……………」

「俺は《水嵩 孝一》ってんだ」

そこまで言うと、少女は何を思ったのか、側にあったオレンジジュースに指を浸すと、そのまま指で机をなぞり始めた。

“リ”：“ナ”：

「リナ？」

こくりと少女が頷いた。

リナ。きっとこの子の名前だな。

「リナか。いい名前だな」

そう言つて頭を撫でてやると、少女、基リナは嬉しそうになつてと笑った。

「お菓子はもう貰ったか？」

リナは首を傾げると、左右に振つた。
もらってないって事だな、たぶん。

「ほら。余りもんだから大した物じゃねーけど、やるよ」

リナの手の平に渡したのは数個のチョコレートだ。
本当はパーティーが終わった後に食べるつもりだったんだけど、ま、

チョコレートなんて購買に行けば腐るほど売ってるしな。

「……………」

リナは手の平に置かれたチョコレートをまじまじと見た後、静かにポケットにしまった。

うーん、チョコレートはすぐに溶けちまうから、なるべく早く食べてほしいんだけどな。なんか言える雰囲気じゃないしな。

何も喋ってはいけないけど、リナの顔は本当に嬉しそうだった。

「孝一さん！」

「よオ、綾瀬」

今回のパーティーの主催者でもある綾瀬が来た。

綾瀬のしている仮装は吸血鬼だ。

…なんか配役間違ってる気がするけど、俺の気のせいかな？

「けっこう似合ってますね、ミイラ男」

「……………」

全く以て嬉しくねーよ！

どこに体中ぐるぐる巻きにされて喜ぶ奴がいるよ！

「どうせやるなら俺も吸血鬼とか狼男が良かったよ」

「すみません、衣装が間に合わなくて。被り物を使って目玉親父ならできたんですけど…」

「ミイラ男で良かった！！！」

詰まる所全裸じゃねーかよ!!

前言撤回。ミイラ男で本当に良かった!

「私はそれでも良かったんですけど」

「……一応聞くが、冗談だよな?」

今の会話だと冗談に聞こえねーぞ。

「目玉親父の方が必要経費の節減になりますし」

「次言ったら、例え女でもシバくぞてめえ!」

けっこう腹黒いなこいつ!

「ところで、ここで何をしてるんですか?」

「ん?ああ、この子と話をしてたんだよ……って、あれ?」

いない…?

「誰かいたんですか?」

「ああ、女の子がな」

「……妄想、ですか?」

「……どうやら本気でシバかれたらしいな?」

「冗談ですよ、冗談」

「だったらもう少しまともな冗談にしろ！」

人の事を散々おちよくりやがって。

一体何がしたいんだこいつは！

「それより早く準備して下さい」

「は？」

準備って、何を…？

「最後の出し物です」

そう言って綾瀬は笑った。

「レディースアードジェントルマン！」

マイクを握る吸血鬼姿の綾瀬が高らかにそう言った。

「いよいよ最後はデュエルアカデミア限定の出し物、《仮装デュエル》です！」

「はあ…」

俺は盛大にため息をついた。

まさかこんな恰好でデュエルをやらされる事になるとは思ってもしなかった。

しかもどうやったのか、俺のデュエルディスクとデッキもきちんと用意されていた。

この2つは今日はないと思って寝泊まりしているレッド寮に置いてきたはずなんだが…。

「つーか、家宅侵入罪じゃねーかこれ」

プライバシーも何もあつたもんじゃねー。

犯罪はごく身近な場所で行われていた。

「赤コーナー！ミイラ男君〜！」

君ってなんだ、君って…。

つか俺の名前はミイラ男じゃねー！

「はあ…」

それより相手は一体誰なんだ？

「青コーナー！見習い魔女っ子、楓ちゃん！」

「……………」

奥の扉から楓が出てきた。

気のせいかな。若干楓の顔がやつれて見える。
もしかして…、

「……楓」

「言わないで」

「けどな……」

「言わないで」

「……………」

色々と苦勞してんだな、あいつも。

「はあ……。まあいい。始めるか」

「そうだね」

そうして俺達は左腕に装着してあるデュエルディスクを展開する。

「手加減はしない。全力でいくぜ!」

「こっちだって前回のリベンジをさせてもらっから!」

「それじゃあ皆いくよー!」

「『デュエル!スタート!』」

楓

LP4000

孝一

LP4000

「今回は私が先行をもらうわ、ドロー！フィールド魔法、《ジャステイス・ワールド》を発動！」

げっ、いきなり《ジャステイス・ワールド》かよ！

「《ライトロード・パラディン ジェイン》を召喚！」

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK/1800

「カードを1枚セットしてエンドフェイズ時、ジェインの効果でデッキからカードを2枚墓地へ送る！」

そして《ジャステイス・ワールド》の効果でシャインカウンターが2つ乗る、か。

シャインカウンター 0 ↓ 2

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK/1800 ↓ 2000

楓

LP4000

手札3枚

いきなり攻撃力2000かよ。

クク、今回のデュエルも面白くなりそうだな。

「いくぜ。俺のターン、ドロー！よし、《ダブルコストン》を召喚
！」

ダブルコストン

ATK/1700

「バトル！《ダブルコストン》で《ライトロード・パラディン
ジエイン》を攻撃！」

「自壊する気！？」

「んなわけねーだろ！手札から速攻魔法、《月の書》を発動！ジエ
インを裏守備に変更する！」

「っ、しまっ…！」

これでジエインを倒せる！

「くらえー！」

『ヒューヒュー！』

「きゃあああ！？」

まあやはりと言うか、《ダブルコストン》は幽霊の如く現れてセッ
ト状態のジエインを破壊した。

「幽霊つよいー！」

「えー怖いよー」

子供は無邪気なもんだな。

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

孝一

LP4000

手札2枚

「（ビ、ビクリしたあ…。でも、こんなにあっさりとジエインを破壊するだなんて…。やっぱりコウは一筋縄じゃいかないか！）私のターン、ドロー！魔法カード、《ソーラー・エクステンジ》！手札から《ライトロード》と名のつくモンスターを1枚捨て、自分のデッキからカードを2枚ドロし、その後デッキの上からカードを2枚墓地に送る！」

さらにシャインカウンターが増える。

シャインカウンター 2 ↓ 4

「更に《ライトロード・サモナー ルミナス》を召喚！」

ライトロード・サモナー ルミナス

ATK/1000 ↓ 1400

「ちい…」

これ以上シャインカウンターを増やされたら、もう俺のモンスター

達じゃ手が出せなくなるな。

どうにかしたいけど、肝心な除去カードが1枚も来ねー。

「ルミナスの効果を発動！1ターンに1度、手札を1枚捨てる事で墓地のレベル4以下の《ライトロード》と名のつくモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する！舞い戻れ、《ライトロード・パラディン ジェイン》！」

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK/1800 ↓ 2200

「いくわよ！《ライトロード・パラディン ジェイン》で《ダブルコストン》を攻撃！ジェインはモンスターと戦闘を行う時、攻撃力が300ポイントアップする！」

ライトロード・パラディン ジェイン

ATK/2200 ↓ 2500

「<ライトロード・スラッシュ>！」

「ぐっ……」

孝一

LP4000 - 800 = 3200

「続けて《ライトロード・サモナー ルミナス》でダイレクトアタック！」

「させねーよ！罠カード、《ガードブロック》！ダメージを0にし、俺はカードを1枚ドロウする！」

「（あちゃー防がれちゃったか）

私はターンエンド！そしてルミナスとジェインの効果でデッキから合計5枚のカードを墓地へ送る！」

くそっ、これでシャインカウンターが更に5つ増える…！

シャインカウンター 4 ↓ 9

「っ、よし！効果処理でデッキから墓地へ送られた《ライトロード・ビースト ウォルフ》の効果発動！このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する！ウォルフを特殊召喚！」

ライトロード・ビースト ウォルフ
ATK / 2100

「そしてシャインカウンターが増えた事によって、ライトロード達の攻撃力は更に上がる！」

ライトロード・パラディン ジェイン
ATK / 2200 ↓ 2700

ライトロード・サモナー ルミナス
ATK / 1400 ↓ 1900

ライトロード・ビースト ウォルフ
ATK / 2100 ↓ 3000

楓

LP4000

手札2枚

「……………」

どう攻略しろと！？俺のデッキの中でこいつら3体にパワー勝ちしてんのレインボー・ダーク1体だけだぞ！しかもまだ召喚条件すら満たしてねーし！

「くっ、俺のターン、ドロー！」

《和睦の使者》か。ダメだ！これじゃ一時凌ぎにしかない！おまけにもう《ジャスティス・ワールド》を除去するのは不可能になっちまったし。先ずはどうかしてあの3体のモンスターを破壊しねーと！

……ギャンブルは得意じゃねーけど、ここは賭けに出るしかねーか。

「俺は魔法カード、《闇の誘惑》を発動！デッキからカードを2枚ドローし、その後、手札から闇属性モンスターを1枚ゲームから除外する！」

頼むぞ、幸運の女神よ！（別に信じちゃいねーけど…）

「…ドロー…！」

……………っ、よし！

「俺は《闇の誘惑》の効果により、手札から《究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴン》をゲームから除外する」

「なっ！？レインボー・ドラゴンを…！？」

正確にはレインボー・“ダーク”・ドラゴンだけだな。

「モンスターとカードを2枚セットしてターンエンドだ！」

孝一

LP3200

手札1枚

「私のターン、ドロー！私は《ライトロード・サモナー ルミナス》を生け贄に《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》を召喚！」

楓のフィールドからルミナスが消え、新たに金色の鎧を身に付けたドラゴンが現れた。

ライトロード・ドラゴン グラゴニス

ATK/2000

ちっ、また厄介なモンスターが出てきたな。

「グラゴニスは墓地に存在する《ライトロード》と名のつくモンスター1種類につき攻撃力と守備力が300ポイントアップする！」

おまけに《ライトロード》と名のつくモンスターは全て《ジャステイス・ワールド》の影響下だ。

当然グラゴニスも例外じゃねー！

ライトロード・ドラゴン グラゴニス

ATK/2000 ↓ 3500

「……………」

はははっ、ここまできたら笑いすら起こらねーよ。

攻撃力3000クラスのモンスターが3体って冗談きついで。

「さあバトルよ！グラゴニスでモンスターに攻撃！グラゴニスは貫通能力がある！壁なんて関係ないわ！」

「はっ！俺だってそう簡単にはやられねーよ！畏カード、《ガードブロック》！」

「2枚目の《ガードブロック》！？」

あつぶねー！《ガードブロック》のおかげでなんとか貫通ダメージは防げた。

「破壊された《終焉の精霊》の効果発動！このカードが戦闘破壊された時、除外されている闇属性モンスターを全て墓地に戻す！」

「何を狙ってるのか分からないけど、これで決める！《ライトロード・ビースト ウォルフ》と《ライトロード・パラディン ジェイン》でコウにダイレクトアタック！」

「畏カード、《和睦の使者》！このターン中に発生する戦闘ダメージを全て0にする！」

「（！？何故今頃…?!）」

って顔してんな。

ま、それが今回の作戦だからな。

今回の作戦は《終焉の精霊》がちゃんと戦闘破壊されなきゃ成り立たない作戦だったからな。

「…カードを1枚伏せる。エンドフェイズ時、デッキの上から計5枚のカードを墓地へ落とす」

シャインカウンター 9 ↓ 14

「更に今ので新たなライトロードが1体墓地に行った事で、グラゴニスの効果が発動！」

プラス《ジャスティス・ワールド》の効果も加算されて、更に攻撃力が上昇するな。

ライトロード・パラディン ジェイン
ATK / 2700 ↓ 3200

ライトロード・ビースト ウォルフ
ATK / 3000 ↓ 3400

ライトロード・ドラゴン グラゴニス
ATK / 3500 ↓ 4200

楓

LP4000

手札1枚

「攻撃力4000越えかよ」

とんでもねーな。

LP4000制だと、ここまで脅威に感じるのか。
あーこりゃ勝てねーかもしれないな。

「……ふん」

へっ、それがなんだってんだ。

俺はただ、どんな相手でも全力で応戦するだけだ！

「いくぜ。俺のターン、ドロー！」

………！

クク、最後の最後でお前も戦いたいってか。
いいじゃねーか、いくぜ！

「魔法カード、《トレード・イン》！手札のレベル8のモンスターを1枚墓地に送り、デッキからカードを2枚ドローする！手札から《破壊竜ガンドラ》を墓地へ送る！」

そして2枚ドロー！まだいける！まだ戦える！

「俺は《ファントム・オブ・カオス》を召喚！」

すると、俺の場に黒い影のようなものが出てきた。

ファントム・オブ・カオス
ATK / 0

「《ファントム・オブ・カオス》？」

「《ファントム・オブ・カオス》は墓地のモンスターを除外する事でそのモンスターの力を受け継ぐ事ができる！」

「つまり、効果のコピー？」

「それも高性能のな。《ファントム・オブ・カオス》の効果発動！
ガンドラを除外し、ガンドラの能力と姿、攻守力をコピーする！<
ファントム・アビリティ>！」

効果名を叫んだ瞬間、ズブズブと音を発てながら《ファントム・オブ・カオス》の姿が変化していき、やがてそれは紛れもないガンドラの姿へと変貌した。

ファントム・オブ・カオス（破壊竜ガンドラver.）
ATK / 0

「受け継いだガンドラの効果を発動する！LPを半分支払い、フィールド上に存在するこのカード以外のカードを全て破壊し、ゲームから除外する！」

孝一

LP 3200 - 1600 = 1600

「くられ！<デストロイ・ギガ・レイズ>！」

《ファントム・オブ・カオス》の宝石が赤く輝き、場のカード全てを飲み込む。光が落ち着いた頃には俺達のフィールドには《ファントム・オブ・カオス》と《ジャスティス・ワールド》以外のカードが全て消え失せていた。

「フィールド魔法はジャスティス・ワールドシャインカウンターを2個取り除く事で破壊を免れる事ができる！」

「知ってるよ。《ファントム・オブ・カオス》はくデストロイ・ギガ・レイズ>によって除外したカード1枚につき、攻撃力が300ポイントアップする」

ファントム・オブ・カオス（破壊竜ガンドライバー）

ATK/0 ↓ 1800

「と言っても、《ファントム・オブ・カオス》は相手に戦闘ダメージを与えられないんだけどな」

こいつが相手に与える戦闘ダメージは全て0になる。
これだけではどのモンスター効果をコピーしても変わらない。

「カードを2枚セットしてターンエンドだ」

当然ガンドラの効果をコピーした《ファントム・オブ・カオス》は墓地に送られる。

孝一

LP1600

手札0枚

やれる事は全てやった。
後は運次第だ。

「私のターン、ドロー！魔法カード、《ソーラー・エクステンジ
》！手札のライトロードを墓地へ捨てて、デッキからカードを2枚
ドローし、その後、デッキの上からカードを2枚墓地へ送る！」

ここで手札増強か。さて、どう出る？

「……ねえコウ」

「うん？」

「コウのエースモンスターはガンドラだね？」

なんだ急に？

「ああ、そうだ」

「そっか……」

…なんだ？なんかとてつもなく嫌な予感がするんだが。

「なら、今度は私のエースモンスターを見せてあげる！」

「…おい…まさか……」

「このカードは墓地にライトロードと名のつくモンスターが4種類
以上存在する時のみ手札から特殊召喚できる！」

ちよおつと待て！まさかここにきてアイツを出す気が、こいつは…！！

「さあ来て！《裁きの龍》！」
ジャッジメント・ドラグーン
「くっく！」

次の瞬間、楓の背後から眩しいくらいの光を放ちながらバカでかい銀色のドラゴンが姿を現した。
つか、本当に眩しい！目を開けてられねー！

裁きの龍

ATK / 3000

「《裁きの龍》…」

やな予感的中ウウウウウウー！

この状況で《裁きの龍》って、どう防げってんだよ！

「《裁きの龍》の効果発動！LPを1000ポイント払い、フィールド上のこのカード以外のカードを全て破壊する！いけ！<裁きの雷>！」

途端、フィールド上に大量の白い雷が降り注ぎ、気付いた時にはフィールドには楓の《裁きの龍》以外に何も残っていなかった。
鬼だ。目の前に鬼がいる。

ガンドラの効果もそこそじゃねーかと思ってたけど、これはない。こいつに比べたら、ガンドラの効果なんて無いに等しいのではなからうか。

「攻撃用意！」

すると、《裁きの龍》の体から光り、電流が溢れだした。
見れば口内にエネルギーを溜め込んでいる。

「いけ！《裁きの龍》！＜サンダー・ボルトオオー＞！！」

「っ、うおあああああああ！！！！」

孝一

LP1600-3000〃0

負けた。

この世界に来て初めての敗北だ。

つか、最後の一発は効いたわあ！。

いつてー…。

「大丈夫？コウ」

「なんとか…」

少し無理矢理に上半身を上げると、楓が手を差し出した。

「ふふっ、これでお互いに1勝1敗だね」

「次は負けねーぜ」

「私だつて…」

その時、周りからものすごい歓声が広間に響いた。

「お姉ちゃんが勝ったー！」

「ミイラ弱い！」

「白いドラゴンかつこ良かったー！」

子供は無邪気な分、ひどく残酷だという事が分かった。
つか、包帯引つ張るなー！絞まる絞まる！

「いてててててー！」

「ミイラ！次は私と遊ぼう！」

「僕だよー！」

「分かった！分かったから引つ張るなー！！！」

それは包帯じゃなくて地毛だー！！

「ふふっ、人気者だね。コウ」

「そうですね」

色々と引つ張られている俺を楓と綾瀬は微笑ましそうに見ていたの
だった。

「はあ……」

さ、散々な1日だった。

あの後、あのガ……ガキ共にミイラ男の恰好のままで寮の中を歩き回され、途中で子供達に絡んできたブルー男子をとりあえず説得（する前に慌てたように逃げてったが……）したりと、ま、忙しい1日だったが、さつきようやく子供達も帰っていった。

そっぴやあれから最後まであの女の子は見なかったけど、あの子もちゃんと帰ったかな。

まあ綾瀬の事だから漏れがあるとは思えないけど。

「結局あの子とは喋らず仕舞いだっ たなー」

あるとすりやそこだけが心残りかな。

せめてパーティーを楽しんでくれたならいいんだけど。

「……終わった事いちいち考えたって意味ねーな」

帰ったらさつさと寝よ寝よ。

そう頭の中でまとめて俺はレッド寮に戻って行った。

「……………」

それを遥か上空から月をバックに、何かがじいっと俺を見ていた事に気付く事はなかった。

第3話「ミイラ男と少女？」（後書き）

次回は今回の話の続きのようなものになる予定です。
ではまた次回もよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5830u/>

遊戯王～blaze～

2011年10月8日18時57分発行